

中国の文学史観

川合康三編



創
文
社
刊

中国の文学史観

川合康三編



創文社

〔中国の文学史観〕

二〇〇二年二月二五日 第一刷印刷
二〇〇二年二月二八日 第一刷発行

編者 川合 康三

発行者 久保井浩俊

印刷者 藤原良成

発行所 株式会社 創文社

〒100-0003

東京都千代田区麹町二一六―七

電話 〇三―三六三―七一〇一

振替 〇〇110092472

<http://www.sobunsha.co.jp>

編者との申し合せにより検印省略

藤原印刷・鈴木製本

ISBN4-423-90024-6

Printed in Japan

目次

一 今、なぜ文学史か——序にかえて	川合康三	三
一 「中国文学史」の誕生		三
二 歴史観の問題		九
三 文学史成立の要件——持続性・個性		一六
四 中国における文学史的思考		三
二 初盛唐期における復古文学史観の形成過程	乾源俊	元
はじめに		元
一 陳子昂「修竹篇」と「序」、及び盧藏用「陳氏集序」		三
二 李白「古風」五十九首（其一）と李陽冰「草堂集序」		四
三 殷璠「河岳英靈集序」と杜確「岑嘉州集序」		五
四 まとめと課題		五
三 文学の歴史学——宋代における詩人年譜、編年詩文集、そして「詩史」説について	浅見洋二	六
はじめに		六
一 「詩史」説		六

二 詩人年譜と編年詩文集	六
三 詩人年譜・編年詩文集にあらわれた文学観	七
四 詩人年譜・編年詩文集と「詩史」説	八
おわりに	九
四 葉燮の文学史観	一〇
一 作論の体——『原詩』の理論水準	一〇
二 文学史の発展観——周期論と段階論	一〇
三 文学史の原動力論——自律と変	一一
五 「母胎文学」の構想——中国の恋愛文学を手がかりに	一二
はじめに	一二
一 恋愛文学の貧困	一四
二 「寄託」という表現手法	一六
三 友情のかたち	一四
四 「母胎文学」の痕跡	一五
五 「母胎文学」と文学史	一五
六 明治期刊行の中国文学史——その背景を中心に	一七
はじめに	一七
一 学制——近代的教育制度の成立	一八

二	東大および附属古典講習科——「文学史」の著者たち	一六三
三	「文学」関係の専門学校の成立——「文学史」の機能する場	一六六
七	『支那文学大綱』と田岡嶺雲	一八二
一	明治三十年代の漢学	一八二
二	『支那文学大綱』発刊の経緯と同人	一八四
三	『支那文学大綱』の執筆者と各冊の概要	一八七
四	田岡嶺雲と『支那文学大綱』	一九九
五	田岡嶺雲の生涯と性向	二二一
六	まとめ	二二六
八	人情の探求と小説史の構築——笹川種郎著『支那小説戯曲小史』をめぐって	二三五
	はじめに	二三五
一	「中国」小説史の構築	二三五
二	人情の探求	二三六
三	「国民文学」派からの批判	二四〇
四	『小史』以後	二四七
九	林庚『中国文学史』を探る	二五七
一	林庚『中国文学史』の論述の骨組み	二五七
二	『中国文学史』の論述の基点	二六三

三 「驚きの精神」	二六
四 「物語的構成」	二六〇
五 結 び	二六六
十 「民間」から「人民」へ——『中国文学史』上の正統論	二九三
一 「民間」こそ人民の主体	二九三
二 旧文学の文人もまた人民の一部	二九六
三 「人民」民間」の否定	三〇四
四 民間文学にふさわしい地位	三〇八
五 愛国主義と文学史	三二三
あとがき	三三五
執筆者紹介	三三九
資料篇 日本で刊行された中国文学史——明治から平成まで	
第一部 明治篇	分担執筆
第二部 大正・昭和戦前篇	松本 肇
第三部 昭和戦後・平成篇	松本 肇
索引（人名・書名）	5
欧文目次	3

CONTENTS

1	Literary History : Why now ? Introductory Remarks	Kozo KAWAI	3
2	The Formation of Revivalist Views of Literary History in the Early and High Tang	Mototoshi INUI	29
3	Historicizing Literature : Song Chronicles of Poets' Lives, Chronological Single-Author Collections, and the Idea of <i>Shishi</i>	Yoji ASAMI	61
4	Ye Xie's View of Literary History	JIANG Yin	101
5	Literature in the Raw : An Unmediated Look at Chinese Love Poetry	Kozo KAWAI	133
6	Meiji Publications of Chinese Literary History	Hiddenobu WADA	157
7	Taoka Reiun and <i>The Great Net of Chinese Literature</i>	Noriyuki TAKEMURA	181
8	The Search for the Humane and the Construction of a History of <i>Xiaoshuo</i> in <i>A Short History of Chinese Xiaoshuo</i>	Masaru NISHIGAMI	225
9	An Exploration of Lin Geng's <i>History of Chinese Literature</i>	CHEN Guo-qiu	257
10	From "Folk" to "The People" : Orthodoxy in Chinese Literary Histories	DAI Yan	293
	Postscript	Kozo KAWAI	325
Histories of Chinese Literature written in Japanese : Meiji to Heisei			
1	Meiji	Edited by Kozo KAWAI	17
2	Taisho to Showa (pre-World War II)	Hajime MATSUMOTO	85
3	Showa (post-World War II) to Heisei	Hajime MATSUMOTO	105

中国の文学史観

一 今、なぜ文学史か

——序にかえて——

川 合 康 三

一 「中国文学史」の誕生

「中国文学」の歴史は、『詩経』のなかの早い詩篇から数えればほぼ三千年、思い切り遅らせて「文学自覚の時代」(魯迅)と言われる魏晉の時期に今日言うところの文学に近いものが始まったとして、そこから数えても千八百年、いずれにしろ他の文化圏に例のない長さをもつことは今更言うまでもないが、しかし「中国文学史」の歴史はというと、わずかこの百年に過ぎない。今からほぼ百年前の一八九七年(明治三十年)、古城貞吉が著わした『支那文学史』が世界で最初の中国文学史であると一般に言われている。ただ、その前後にはほかにも少なからぬ中国文学史が世に出ている。⁽¹⁾本書の「資料編」に見えるように、児島献吉郎の『支那文学史』、『文学小史』、藤田豊八の『支那文学史』などは古城に先立って書かれていたようであり、さらに早くはロシアのワシリエフ Vasilii Pavlovich Vasiliev によつて『中国文学史概説』が一八八〇年、⁽²⁾末松謙澄『支那古文学略史』が一八八二年(明治十五年)に刊行されている。ワシリエフの『概説』は未見のため内容はわからないが、末松の『略史』の方はごく小さな冊子で、「古文学」といっても当時はまだ literature の訳語としての「文学」が浸透していなかったので、中国本来の意味での「文学」の歴史、つまり学術史というべきものであり、それも「古」——先秦に限定されてい

1 今、なぜ文学史か

る（本書資料篇の松本肇氏解題を参照）。正しく文学史というべきものには、ケンブリッジ大学教授であったジャーナルズ Herbert A. Giles の『中国文学史』“A History of Chinese Literature”⁽³⁾がある。一九〇〇年十月の序文を付しているから、古城の文学史より刊行はわずかに遅れるが、執筆されたのはほとんど同じ時期であり、その「序言」には「これは中国語も含めたどの言語においても、中国文学の歴史を書く最初の試みである」と高らかに言挙げされている。日本で著わされた中国文学史にも、初期のものにはしばしば自著が最初の中国文学史であるという自負の言葉が記されている。

このように見てくると、「世界最初の中国文学史は何か」ということは簡単に決められるものでないことがわかるし、そもそもそういう問題の立て方はいったい意味をもつものではない。それよりも重要なのは、二十世紀を目前とした時期に至って、突如として中国文学史と題する書物が一斉に書かれ始めたことだ。それが文学史なるものの性質をよくあらわしている。すなわち、文学史という概念は西欧近代が生み出したものであった。十九世紀の西欧において近代歴史学が確立し、そこから派生して文化のなかのそれぞれの領域における通史が書かれるようになり、文学史もその一つとして生まれたのである。⁽⁴⁾

西欧で生まれた文学史という概念は、中国に先んじて日本で摂取されることとなった。末松の前掲書がロンドン遊学中の講演をもとにしていることも、彼の地においてこそ、通史への刺激が強く作用したことによるだろう。また松本氏が末松の項で指摘されているような当時の日本の状況との関わりのみならず、西洋古典学が盛んであったイギリスにあったことが、東洋の古典としての先秦の学術を取り上げる契機になったのだろう。

日本の文学を対象とした文学史として早いものは、三上参次・高津敏太郎の共著『日本文学史』上下二巻（金港堂、明治二十三年（一八九〇））である。その「緒言」のなかからも、西欧に文学史なるものが存在するのを知って、

それを日本の文学についても書き表したいという若い著者たちの熱意がよく伝わってくる。

著者二人曾て大学に在りし時、共に西洋の文学書を繙きて、其編纂法の宜しきを得たるを嘆賞し、また文学史といふ者ありて、文学の発達を詳かにせるを觀、之を研究する順序の、よく整ひたるを喜びき。之と同時に、本邦には未だ彼が如き文学書あらず。また文学史といふ者もなくして、本邦の文学を研究するは、外国の文学を研究するよりも一層困難なることを感ずる毎に、未だ曾て、彼を羨み、此を憐み、如何にもして、我国にも彼に劣らざる文学書、また彼に譲らざる文学史あらしめんとの慷慨の念、勃然として起らざること無かりき。

(一—二頁)

ここで「文学書」というのは、古今の代表的な文学作品を解題・作者評伝とともに抄録したアンソロジーのようなものを指しているようで、そうした類の本が日本にはまだなかったことから、「文学書」と「文学史」を兼ね備えたようなものを意図したと、「緒言」の後の部分で述べている。そして「仏国のティン」(イポリット・テーヌ『英国文学史』、一八六四)など西欧の文学史家の名前を挙げていることから、範を西欧に仰いでいることが知られる。こうして「本書は実に本邦文学史の嚆矢なり」(九頁)と称する書物が世に出たのであった。

「緒言」に言うように、著者二人が日本文学史執筆の志を興したのは、大学に在学中の時であった。出版されたのは三上参次(一八六五—一九三九)が二十五歳の時である。古城貞吉(一八六六—一九四九)の場合も『支那文学史』刊行は三十一歳、藤田豊八(一八六九—一九二九)と笹川種郎(臨風)(一八七〇—一九四九)はともに二十八歳、いずれも極めて若い時期にこのような大部の通史を書き上げていることには、驚嘆するほかない。どの分野においても弱年にして第一線で活動しているのが明治期全体の傾向であろうが、西欧の文学史に刺激されて東洋の文学史に挑むという新しい試みは、若い学徒をこそ惹き付けるものがあつたのだろう。初期の文学史家に共通する

もう一つの性格は、彼らはいずれも後年必ずしもその道の専家とはならず、三上は国史、古城と藤田は東洋史、笹川は日本美術、というように、他の分野で学問的業績をあげていることである。これも今日では考えにくいことのように思われる。当時は長年の研鑽を積まなくても通史が書けるほどの力を備えていたのであろうか。また学問領域がまだ未分化の状態で、専門的なディシプリンも確立していなかったために、容易に他の分野に移っていったのであろうか。それにしても、今日では学的蓄積の集大成であるかのように考えられている文学史執筆が、明治期においては出発点において成されているということは、当時と今の文学史が含む性格の違いを示すものでもあろう。

三上・高津『日本文学史』は「総論」において、文学史の対象とすべき「文学」をどのように定めるか、かなりの筆を費やしている。当時、文学が小説にのみ偏っていたことに古典学者であつた著者たちは不満を覚え、文学をもっと広くとらえることを主張して、定義まで下している。文学史執筆に当たって何を文学とするかから始めなければならなかったのは、中国でも同様であつたようで、そのことは戴燕氏の論文「文学・文学史・中国文学史——論本世紀初『中国文学史』学的発軔⁽⁵⁾」にも詳述されている。中国では旧来の意味での「文学」と日本から入つてきた literature の訳語としての「文学」とが、二十世紀初頭においても混在していたという事情が、それをいっそう複雑にしていたのである。一八九七年という早い時期に中国で書かれた『歷朝文学史』が「文学史」とは言いながら、実際には「国学概論」であつたといふのは、上に挙げた末松謙澄の『支那古文学略史』と同じ事情を物語る。⁽⁶⁾

西欧の文学史に範を取つた日本文学史の誕生が、中国文学史の執筆をうながしたことは、疑問の余地がない。古城は明治二十四年秋から『支那文学史』を書き始めたといふ「凡例」のなかで記しているが、それは三上・高津『日本文学史』が刊行された翌年のことである。中国より身軽に西欧の近代文化の摂取を始めた明治期の日本において、西欧から伝来した文学史という概念と日本に古くから浸透していた漢学の蓄積とが結びつき、そこに中国文学史が

誕生することになったのである。中国文学史という書物が日本でいち早く書かれたことは、決して偶然ではなかった。

文学史の概念を生み出した西欧においても、中国を対象とした文学史が意図されたのは当然であり、前述したワシリエフ、ジャイルズなどの文学史が出ているが、ただ、西欧においては日本ほど体系的に中国の文化・学術を容していなかったために、古城及びその時期に相次いで出た日本人の手になる中国文学史の方が、中国に与えた影響は大きかったようだ。朱自清は中国で執筆された早い時期の中国文学史はおおむね日本のその影響を受けていると指摘している。⁽⁷⁾ 陳玉堂『中国文学史書目提要』から拾い上げてみると、日本で書かれた中国文学史が中国で翻訳されたものには、笹川種郎『歷朝文学史』（上海中西書局、一九〇三）、古城貞吉『中国五千年文学史』（開智公司、一九一三）などがあり、ほかにも林伝甲『中国文学史』（一九一〇）は早稲田大学の講義録に倣ったものであり、曾毅『中国文学史』（二九一五）は児島猷吉郎の文学史を、康璧城『中国文学史大綱』（一九三三）は笹川『歷朝文学史』を襲っていることが指摘されている。

鄭振鐸はジャイルズの『中国文学史』に創始者としての功を認めながらも、その疎漏を糾弾しているが、⁽⁸⁾ 彼が挙げる例はいみじくも中国の伝統的な文学観と西欧のそれとの相違を示している。ジャイルズが園芸の手引きのような実用書まで文学史のなかに取り込んでいることは、鄭振鐸が言うとおり当を得ないにしても、それに並べて『聊齋志異』について鄭振鐸が「在中国小説中並不算特創之作」（三三頁）としてジャイルズの評価が過大であると批判するのは、『聊齋志異』の評価が定着している今日から見ると異和感を覚えざるをえない。ここにまた、小説に對して当時の中国ではまだ文学として十分な価値が認められていなかったこと、西欧近代では小説・戯曲が文学の中心的ジャンルであったために中国の小説についても多くの紙数をさいていること、そうした両者の違いが浮かび

上がる。

古城の文学史には小説・戯曲の項目はなく、白話小説はもちろん、文言小説である『聊齋志異』も記述されていないが、それは中国の伝統的文学観に従ってそうだったものでは実はなく、白話小説・戯曲を記述する必要は痛感しながらも十分な学力がないために割愛せざるをえなかったのだという。⁽⁹⁾後年の回顧であることを顧慮せねばならぬにしても、当時の日本で中国俗文学への関心が高まっていたのは確かだ。林伝甲『中国文学史』は前述のように笹川種郎の文学史に範を取っているにもかかわらず、笹川が金元明清の俗文学を取り上げているのに対して、林はそれを見識が低いと退けている。夏曉虹氏は笹川の文学観の方が進んでいたと記しているが、西欧近代の文学観が日本においてより早く浸透していたことは確かである。笹川には『支那文学史』の一年前に『支那小説戯曲小史』（東華堂、一八九七）があり、笹川・田岡等著『支那文学大綱』には小説・戯曲も取り込まれているし、さらに宮崎繁吉『支那近世文学史』（早稲田大学出版部、刊行年不明）は金元から清までの時代に限定して、そのなかに元明清の小説・戯曲の章も設けられるなど、小説・戯曲は当時の日本では新しい領域として熱い視線を浴びていたかのようだ。そこにも日本の漢学者が中国の伝統を継承しながらも、中国よりも身軽に西欧の新しい文学観を受け入れていた事情がうかがわれる。中国で戯曲・小説が文学通史に登場するのは、『中国文学史書目提要』によれば、張之純『中国文学史』（一九一五）、謝無量『中国大文学史』（一九一八）あたりからのようだ。

このあと、日本でも中国でも陸続と中国文学史が執筆され、その数は膨大なものになるが、⁽¹¹⁾ここで確認しておきたいのは、中国文学史はわずかこの百年の産物であって、中国古典文学の長い歴史のなかではごく最近のことに過ぎず、近百年の目でもって二千年を越える過去を捉えているということである。

二 歴史観の問題

近代が作り出した「文学史」という装置を使って、それ以前の長い時代を扱おうとすることは、多くの不適切な事態を生ずることになる。日本文学史の場合のこの問題を明確に指摘したのは、丸谷才一氏である。「十九世紀の西洋で確立した国別文学史の型のなかに日本文学史を押し込めようとしてゐる」ことから生じる問題を、丸谷氏は次のような七つの項目にまとめている。⁽¹²⁾一、近代国家を基準とした見方では日本の長い歴史を扱えない。二、ナシヨナリズムに基づくために他国との関連を見落とす。三、民主主義の時代ゆえに宮廷文化を評価できない。四、個人主義の時代ゆえに様式が優先する古典を捉えきれない。五、写実主義の立場では日本の文学は理解しえない。六、生活と未分化の文学を純粹な芸術として捉えようとするとう理解を誤る。七、「進歩」という観念にとり憑かれた立場は、過去の文学を扱うのに不都合である。

丸谷氏が日本の文学史について挙げた問題は、ほぼそのまま中国文学史にもあてはまってしまふ。近代は古い社会制度が崩壊し、「市民」が中心になつた時代であるが、中国の伝統的詩文は士大夫階層によつて担われたものであるから、市民・庶民中心の価値基準を無理に押しつけて判断してみても不毛な結果に終わるほかない。一時期の中国で政治イデオロギーが学術をも支配し、「人民」への貢献度を基準にして文学の価値が決められていた状況はその極端な例であろう。

より本質的な問題に歴史観の相違がある。近代の歴史観は、進化論とも関わりつつ、人間の歴史を近代という最高の到達点に至る上昇の過程として捉える。したがって文学史の記述のなかにもしばしば「発展」ということばが

1 今、なぜ文学史か